慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初学者のためのカナによるドイツ語発音表記法試案
Sub Title	Ein Entwurf zu einem Lautschriftsystem des Deutschen in Kana, japanischen Silbenschriften, für Anfänger
Author	鐵野, 善資(Tetsuno, Yoshisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.367- 382
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0367

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初学者のためのカナによる
ドイツ語発音表記法試案

鐵　野　善　資

1.

ここに　私が，「初学者のためのカナによるドイツ語発音表記法試案」の提出を思い立った直接の動機は，文学部助教授　尾崎盛景先生のお手伝いで，「法経科大学生のドイツ語入門（法学篇）」（三修社）のカナによる発音表記に携わり，従来の表記法に対する不満を感じたことである。すなわち，あまりにも一般外来語の表記法に従い過ぎているように思われるのである。外来語として取り入れる場合の表記法と，発音を教えるための表記法とは，おのずからその性格を異にすべきであろう。

国語におけるカナは「子音＋母音」のまとまりを一字で表わしており，したがって子音が二つ以上音節のはじめに立つこともない。ところが単独の子音をもこのカナで表記しようとするのであるから，無理があるのは当然である。さらに，日本人の発音習慣にない音があり，カナでは表記できないものもある。外来語の場合には，日本人の発音習慣に合っているそれらしい音で表記するのも止むを得ないであろうが，その結果，音節末の子音，音節はじめの子音群などは適当に母音を添えて発音されることになり，外来語は原語に較べて，音節数が多くなってしまう。従来の一般表記法を用いれば，上記のような結果になるのはごく自然である。発音を教える場合には，原語が必ずあるから，それと対照すれば，この不完全なカナ表記でも充分であるという考えも一部にはあるようだが，それは外国語に熟達

した教授者には容易なことであっても，初学者は，カナで表記してあれば，そのカナにしたがって発音し，外来語程度の発音ですませてしまうのではなかろうか。従って，視覚的に読者の注意を促す何らかの手段を講ずるべきであろう。不注意な読者は教授者の細かい配慮に気づかぬこともあろうが，注意深い読者もいるはずであるから，そのための努力を惜しむべきではないと思う。

一般外来語の表記法に多少の約束をつけ加えただけのカナに頼り切れない感じを抱く初学者も少くない。一般に，外国語の発音を示すカナに対しては不信，不安の念があり，国際音声字母で示さなければ駄目だという意見も相当に多い。しかし，初学音にあっては，音声字母が正確に読めるとは限らず，また中学で用いる英語教科書では最初から音声字母によって表記してあるはずであるが，これの読めない学生，あるいはこれを利用する意欲のない学生も相当数見かけられる。これらの学生は論外としても，音声字母を利用する学生が，英語で習った音をそのままドイツ語の発音に流用するのは見逃せない事実である。これはいかにも具合が悪い。このような場合には，カナと音声字母を併用することによって，正しい音に導くのが良策であろう。私はカナよにる発音指導には捨てがたい効果があると考えている。そのためにも，カナに対する偏見を抱かせないような改良を加えることができればと願っているものである。

因みに，英独の辞書2，3点の発音表記法を調べて見ると，以下の如くである。(一例としてフランス語から入った Chauffeur の表記を挙げる)。Henry Cecil Wyld の The Universal Dictionary of the English Language (1952年，第七版による) では，ごく普通の文字による一般読者用の表記法 (System No 1.) と音標文字 (国際音声字母と異なる記号も用いられている) によるより精密な表記法 (System No 2.) の2種類を用いている。例語は [1. shōfër ; 2. ʃo*u*fʌ̄] と表記されている。国際音声字母では [ʃoufə(:)] となるところであろう。

Random House から出ている The American College Dictionary (1956年版による) では，普通の文字に符号をつけて発音の区別を示してある。

schwa(ə) の記号は特に採用している。例語に対する表記は (shō′fər, shōfûr′) である。特殊な符号をつけたものに対する key は各頁の最下欄に列挙してある(ōver, ûrge etc.)。Langenscheidt から出ている Taschenwörterbuch der Französischen und deutschen Sprache, 1. Teil Französisch-Deutsch (1952年改新版による) では, Toussaint-Langenscheidt 式音標文字と銘打ったものを用いているが, これも要するに一般読者向きの発音表記法である。ここでは [ʃchofö′r] と表記されている。

Duden の Rechtschreibung (1967年, 増補16版による) 及び3巻本の Duden-Lexikon (1961 年, 初版による) でも国際音声字母は用いていない。例語の表記は [*schoför*] になっている。また, Duden の Grammatik (1959 年, 初版による) における音に関する項でも普通の綴字に近い表記法を採用している。(ただし, 1966 年に出た増訂第2版では国際音声字母が採用されている。)

辞典類の他に, 旅行用の会話手引書などにおいても, 国際音声字母が利用されることはまずないと言ってもよいであろう。

勿論, 国際音声字母を用いている百科事典なども出版されてはいるが, それを避ける傾向のあることも事実である。

国際音声字母の理解・習熟のための努力という点で, 我々日本人に較べてはるかに有利な立場にある欧米人ですら, 自分達に親しみのある文字を利用しているのである。我々も初学者に対するカナを多少なりとも改良してもっと有効に利用すべきではないかと思う。

2.

本稿においてカナによるドイツ語発音表記法をまとめるにあたり, 特に留意したのは以下の諸点である。

1) 原則としてカタカナを用いる。

ひらがなを混用する可能性としては, (イ)母音の長短あるいは開閉, (ロ)アクセント, (ハ)特に日本人が識別を要する子音の区別, を表わす場合が考えられるが本稿で強いてひらがなを用いるとすれば, (ハ)だけに限りたい。

2) 可能な限り国語の表記法，従来の外来語表記法の慣用に逆らわず，例外を最少限にとどめて，ことさらに説明をしなくても，大体において正しく読めるものであること。

3) いかなる場合にも混同が起こらず，正確であることを旨として，可能な限り単純化する。

一字一音・一音一字が理想であるのは言うまでもないが，これは実行不可能であるから，二字，あるいは多少の補助記号を用いざるを得ないこともある。ただし，その場合にも不自然なものはできる限り避けて，むしろ従来日本人が慣れているものを大いに生かすことを心がける。

4) 上記のワクの中で，綿密な発音表記を試みるのは当然であるが，学習者または読者が，カナ表記に施された配慮に気がつかないか，あるいはそれを無視したとしても，一応ドイツ語発音と認められるものであること。

不注意な読み方をされても，一応役に立つ程度で，むしろ，その音を出すためのヒントともなるべき表記法を心がける。これを通じて，国語音とドイツ語音との差異が多少なりとも認識されれば，ドイツ語音を習得するための努力も多少軽減されるであろう。

5) 母音または母音を含むものは大文字で，単独の子音は小文字（原則として下ツキ）で表記する。

特に，国語にない音の表記においては，母音字を小さく書く習慣がかなり定着しているようであるが，私の方針を徹底的に実行することによって，原語と同じ音節数にすることが可能である。と同時に，音節を大きな母音字でうきたたせることができる。

ルビを振ったり，カッコ内に小文字で説明，読み方などを入れる場合，文字の大小は全く無視されることがあるが，我々は不自由なくこれを読むことができる。従って上記2）の事項にひどく反することのない限り，子音字をすべて小文字にするのが，最も抵抗も少く，また不自然な感じも与えないであろうと考える。印刷上の手数としてもそう甚しい差はないであろう。

6) 視覚的に見わけ易く，また印刷上の困難もできるだけ少なくするように心がける。

このカナ表記法は書物において用いられるのが本来であろうから，この配慮は当然なすべきことである。単語，あるいは音声字母の下などにカナを置くと，子音を表わす小文字が小さすぎる印象を与えるならば，単語の右横，あるいは音声字母の右横に［　　］をつけてそこに入れてもよいであろう。

3.

上述の方針に従って，国際音声字母とカナを対照して挙げることにする。特に混同の生じる心配のない限り，両方ともに［　］を省略する。ここでは，ドイツ語の綴字を持ち出す必要はないと思う。何故ならば，これは教授者には周知のことであり，初学者がカナ表記をする必要も全くないからである。ドイツ語音に対するカナ表記であるから，国語にある音で無視されるもののあるのも当然である。また本稿においては，ドイツ語で普通に用いられる音に主眼を置き，外来語音にはあまりふれない。ここに用いるカナの表わす国語音は主として東京方言のそれと考えることにする。

実際の運用例は，カナ音声字母の一覧表をまとめた後に，一括して挙げる。

1)　アクセントの表記

アクセントを示す方法としては，アクセントのある母音を，ひらがなにしたり，ゴシック活字を用いたり，その母音の上あるいは下に，・などを付けることが考えられる。本表記法においては，大文字で印刷される母音字のみをゴシック活字で表わすことにしたい。2字あるいは3字で表記される場合も同様である。2重母音では，第一母音のみゴシック活字にする。1音節の語ではアクセントを示さなくてもよいであろう。因みに，新井白石は，「采覧異言」(1713—正徳3—年刊；1881—明治14—年）においてアクセントのある母音の右に傍線を施している。

2)　長音記号

長音記号としては「—」を用い，母音を付加することはしない。視覚的にもこのほうがわかり易く，先行の母音によって，長音を表わす文字が変わるのも不便である。さらに音節数を目立たせるためにも「—」は有効であ

ろう。長音を重母音のように発音する初学者の悪い癖も多少は避けられよう。この記号は，大槻玄澤も，「蘭學階梯」（1783—天明3—年刊）において利用している。母音の開音閉音を区別することは本稿では断念した。

3） 国語のカナ1字で表記できるもの

(イ) 母音

a	i	u	e	o	ə
ア	イ	ウ	エ	オ	エ

簡単のため，母音には以後この音声字母を用いる。

(ロ) 子音＋母音

ka	ki	ku	ke	ko	kə
カ	キ	ク	ケ	コ	ケ
ga	gi	gu	ge	go	gə
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ゲ
sa		su	se	so	sə
サ		ス	セ	ソ	セ
	ʃi				
	シ				
za		zu	ze	zo	zə
ザ		ズ	ゼ	ゾ	ゼ

国語音としては，母音に先立たれる場合以外，破擦音 dz であるが，カナとしてこれ以上，表記しようもなく，また表記したとしても大して効果はないであろう。

ta			te	to	tə
タ			テ	ト	テ
		tsu			
		ツ			
da			de	do	də
ダ			デ	ド	デ
na	ni	nu	ne	no	nə
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ネ

ニは，厳密にいえば ɲi であろうが，ここでは，その差異は無視する。

ha	hi	hu	he	ho
ハ	ひ	ふ	へ	ホ
	çi			
	ヒ			
		fu		
		フ		

hi を日本人は無意識のうちに，çi と発音するのが普通である。あまり効果を期待することはできないが，敢えて［ひ］と［ヒ］で区別してみる。hu, fu はいずれも，日本人の Φu とは異る音でありカナで表記するのは，その Φu を発音させることにもなりかねないが，本稿では一応［ふ］と［フ］で区別しておきたい。

ba	bi	bu	be	bo	bə
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ベ
pa	pi	pu	pe	po	pə
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ペ
ma	mi	mu	me	mo	mə
マ	ミ	ム	メ	モ	メ
ja		ju		jo	
ヤ		ユ		ヨ	

j に対して［ィ］をあて，ィア，ィウ，ィオとすることも考えたが，この場合は，大した実効もなく，文字の結合も一般的ではないので，採用しなかった。j の摩擦は国語におけるのよりも強いが，それをはっきりさせるには，ィヤ，ィユ，ィヨとすることはできる。

la	li	lu	le	lo	lə
ラ	リ	ル	レ	ロ	レ
ra	ri	ru	re	ro	rə
ら	り	る	れ	ろ	れ

［l］，［r］の区別は，我々日本人が外国語を学ぶ際に，いつも問題となるものであるが，このカナでは，カタカナとひらがなで区別してみた。原語に l, r とあるから，わかるはずだとして，カタカナの同文字で両方を表記するのはやはり避けるべきであろう，たとえ気安めにすぎないとしても。

xə	x は他の母音を後に従えることはない。
へ	

(ハ) 単独の子音（小文字で表記する）

i） 語末，音節末にも用いられるもの

k	s	t	ts	ç	f	p	m	l	r
ク	ス	ト	ツ	ヒ	フ	プ	ム	ル	る

ii） 語末，音節末には用いられないもの

g	d	b	z
グ	ド	ブ	ズ

v
ヴ

v に対するカナ表記［ヴ］は，福澤諭吉の考案によるものである。ただし，小文字ではなく現在一般外来語の表記に用いられているのと同じである。福澤全集緒言（「福澤全集」全5巻，1898—明治31—年，時事新報社刊の第一巻，巻頭に掲げられたもの）の「華英通語」の項に「唯原書の v の字を正音に近からしめんと欲し，新たにウワの仮名に濁点を附けてヴヴと記したるは当時思付の新案と云ふ可きのみ。」とあり，（岩波書店，福澤諭吉全集第一巻，1958—昭和33—年，24—25頁），「増訂華英通語」（福澤諭吉の最初の出版物で1860—万延元—年刊）の凡例には，「ウワ附濁点者バブ与ウワ之間音也」とある（岩波書店，福澤諭吉全集第1巻，70頁）。

iii） 符号を伴うもの

ʃ	tʃ
シ゚	チ゚

従来，シュ，チュと表記されているが，私の方法では，ュが邪魔になるので，思い切って，ㄕ，ㄔだけにし，円唇音を示す意味で○をつける。多少の視覚的効果もあろうし，この程度なら，印刷上もまず問題になることはあるまい。

iv） 語末，音節末にのみ用いられるもの

(-a)x	(-o)x	(-u)x	(-au)x
-は	-ほ	-ふ	-ほ

hu に対して［ふ］と表記したが，［-ふ］は小文字であるから，まず混同はないであろう。

v） 語末，音節末の［ン］〔はねる音（撥音）〕

音声学的には，後続音によって［m］([p, b, m]),［n］([t, d, n, etc.]),［ŋ］([k, g, ŋ])，等の音であるが，これは［ン］で表記するだけで充分である。つまり逆行同化の現象が起こるからである。

国語の［ン］は語末にある場合［N］となるので，それを避けるために，［ヌ］とすることも考えられるが，はっきり示そうとすれば［ンヌ］とでもしたくなる。ここでは，それほどの必要も感じないので，一応［ン］で表記することにする。なお，「増訂華英通語」の凡例には，「ヌ字要急音与上字合読之稍近於ン音而自有別」と記されている（岩波書店，福澤諭吉全集第一巻，70頁）。

vi） 重子音，及び先行母音が短音であることを示す［ッ］〔つまる音（促音）〕

この［ッ］は，[p, b, t, d, k, g, s, ʃ, ts, tʃ, ç, x, f]などの前，短母音の後に置かれる。ただし，子音字カナが2つ以上後に続く場合は，この［ッ］は省略することも可能であろう。

小文字のッは国語としては世阿弥（1363—1443）が，その謡曲において用いており（岩波書店，日本古典文学大系第40巻，謡曲集上），外国語に対しては，「増訂華英通語」に用いられている。

(二) 変母音の表記

変母音を表記する場合，特に取り上げる必要のあるのは，ö, ü であるが，さきに㋝，㋞において円唇音を視覚的にはっきりさせたように，ここでも視覚に訴える方法を試みることにしたい。㋝，㋞は○の中が変わることもなく，文字の大きさも変わらないが，変母音には，種々の文字が入り，また，アクセントを示す必要からゴチにすべきものもあるので，○で囲むことは（技術的に出来れば，よいのだが）まず印刷上無理であろう。そこで，唇を横にひろげないように，唇を丸くするという意味で，（　）を用いてみようと思う。これならば，印刷上の問題もなく，特に2字以上の文字で表記される場合に効果を上げることができるであろう。

要するに，唇を丸くしておいて，（　）内の音を出せば，変母音が発

音できるということである。例えば Goethe の発音は，国際音声字母で示すと ['gφ:tə] となるが，これは，[g] を発音してから，やおら，[φ:] の発音に移るのではなく，[φ:] のための口のかまえが整った上で，[g] の発音をすべきであろう。私見によれば，音声字母を上述のように誤って読んでいる人が案外多いのである。この点に関しては，唇を丸くして，[ゲー] と発音する方が，(母音の開閉は別にしても) 実際的であり，効果的でもあろう。教室でも実地に利用しているが，結果はよいようである。カナ表記の捨てがたい一面はここにある。長音の変母音においては，長音記号「ー」もカッコ内に入れることにする。

因みに，楳垣実氏によれば (「日本外来語の研究」132 頁)，神代種亮氏は，Goethe の表記法を 1872 (明治12*) 年の菊池大麓から1928 (昭和 3) 年の茅野簫々まで56年間，延 102 名の表記について調査し，29種 (内 6 種は森　鷗外) を報告しているという。*「56年間」が正しければ明治 5 年の誤りか。

œ	kœ	gœ	zœ	tœ	dœ	nœ
(エ)	(ケ)	(ゲ)	(ゼ)	(テ)	(デ)	(ネ)
hœ	bœ	pœ	mœ	lœ	rœ	
(ヘ)	(ベ)	(ペ)	(メ)	(レ)	(れ)	
ʏ	kʏ	gʏ	ʃʏ	nʏ		
(イ)	(キ)	(ギ)	(シ)	(ニ)		
hʏ	bʏ	pʏ	mʏ	lʏ	rʏ	
(ひ)	(ビ)	(ピ)	(ミ)	(リ)	(り)	

4) 国語のカナ 2 字で表記されるもの

(イ) 二重母音

ai	au	ɔy
アイ	アオ	オイ

母音は大文字で表記するわけであるから，二重母音はカナ 2 字になってしまい，音節数を揃える上から不都合が生じる。従って，ここでは，‿を用いて一音節であること示すことにする。au は [アウ‿] よりも [‿アオ] に近く発音されるので，後者を採用した。

(ロ) 子音＋二重母音

kai gai zai tai dai nai
カイ ガイ ザイ タイ ダイ ナイ

hai bai pai mai lai rai
ハイ バイ パイ マイ ライ らい

kau gau zau tau dau nau
カオ ガオ ザオ タオ ダオ ナオ

hau bau pau mau jau lau rau
ハオ バオ パオ マオ ヤオ ラオ らオ

kɔy gɔy sɔy zɔy tɔy dɔy nɔy
コイ ゴイ ソイ ゾイ トイ ドイ ノイ

hɔy bɔy mɔy lɔy rɔy
ホイ ボイ モイ ロイ ろイ

(ハ) 子音＋母音（od. 変母音）

si sʏ zi zʏ
スイ （スイ） ズイ （ズイ）

ʃa ʃu ʃe ʃo ʃœ ʃə
㋑ヤ ㋑ユ ㋑エ ㋑ヨ （シエ） ㋑エ

㋑ア，㋑ウ，㋑オ などとも出来ようが，混同のおそれはないから，従来の表記法に近いものをとる。また自然に [-j-] が発音されることもあるわけだから。

ti tu tʏ di du dʏ
テイ トウ （テイ） デイ ドウ （デイ）

tʃa tʃe tʃə ʃa…の項参照。
㋜ヤ ㋜エ ㋜エ

tsa tsi tse tso tsʏ tsœ tsə
ッア ッイ ッエ ッオ （ッイ） （ッエ） ッエ

ça çeço çə ʃa…の項参照。
ヒヤ ヒエ ヒヨ ヒエ

fa	fi	fe	fo	fʏ	fœ	fə
ㇷ゚ア	ㇷ゚イ	ㇷ゚エ	ㇷ゚オ	(ㇷ゚イ)	(ㇷ゚エ)	ㇷ゚エ

va	vi	vu	ve	vo	vʏ	vœ	və
ヴァ	ヴィ	ヴゥ	ヴェ	ヴォ	(ヴィ)	(ヴェ)	ヴェ

ji	je	jʏ	jœ	jə
ㇰ゚イ	ㇰ゚エ	(ㇰ゚イ)	(ㇰ゚エ)	ㇰ゚エ

ŋ	ŋə
ンゲ	ンゲ

国語ではガ行鼻音をガギグゲゴと表記することがある。あまり一般的ではないが，gə などとの区別のために用いてみた。しかし，特に ŋ の方は「ンク」と発音される危険性もあるかも知れない。

5) 国語のカナ3字以上で表記されるもの

(イ) 子音十二重母音

ʃai	tsai	fai	vai
㋷ヤイ	ッアイ	ㇷ゚アイ	ヴァイ

ʃau	tsau	fau
㋷ヤオ	ッアオ	ㇷ゚アオ

ʃɔy	tsɔy	fɔy
シヨイ	ッオイ	ㇷ゚オイ

(ロ) pf ; ks, ps ; kv ; ʃp, ʃt について

i) 語末，音節末にも用いられるもの

pf	ks	ps
ㇷ゚フ	クス	プス

後に母音が続く場合，pf は［f］の列（カナ音声字母一覧表」参照）の結合の前に［ㇷ゚］を，ks, ps は［s］列の前に［ク，プ］を置けばよいのである。

ii) 語末，音節末には用いられないもの。

kv	ʃp	ʃt
クヴ	㋷ㇷ゚	㋷ト

後に母音が続く場合には，［v］，［p］，［t］列の結合の前に，［ク］，［㋷］，［㋷］をそれぞれ置けばよい。

6) その他

i) r の母音化

近頃，語末あるいは音節末の r がアのように発音されるということを初級から教える傾向がある。これは，［ァ］で表記できるであろう。あくまでも子音であるから，小文字を用いる。

-ir	-ur	-or	-er	（1音節語に限る，2音節以上の語については ii 参照）
イ-ァ	ウ-ァ	オ-ァ	エ-ァ	

ii） アクセントのない［ər］（-er- 2音節以上の単語末）

この場合には長音記号をつけず，五十音図ア列の音で打ち切ればよいと思う。特に，-ŋər は［ンガ］と表記する。

iii） 区切りについて

複合語（分離・非分離動詞なども含めて）の場合，「子音＋母音＋子音」＋「子音＋母音＋子音」のような連続の生ずることがしばしばあるが，読み違いが予想されるならば，・（中グロ）を入れるべきであろう。分離動詞の場合などは，辞書で用いられる｜（タテ線）を入れておくのもよいと思われる。非分離動詞であっても，読みにくいものには，中グロ程度を入れるのが親切ではなかろうか。

4.

初学者のためのカナによるドイツ語発音表記法として，以上にその大綱を述べた。その特色をまとめると次の如くである。

- 大文字のカナで母音および母音を含んだものを表記し，小文字で子音を表記する。
- その結果，原語とカナ表記との音節数をそろえることができる。
- 変母音を表記するにあたり，円唇音であることを示すために（　）を用い，（　）内のカナを意識して発音すれば，その変母音ができるようにする。
- 子音中，ッ，ッチに○をつけて，円唇音であることを示す。
- 日本人にとって区別しにくい音などをカタカナとひらがなで識別させる。

以下に，上述の結果得られた一覧表を掲げる。

ドイツ語のためのカナ音声字母一覧表

	[a,aː]	[ɪ,iː]	[ʊ,uː]	[ɛ,ɛː,eː]	[ɔ,oː]	[ʏ,y]	[œ,øː]	[aɪ]	[aʊ]	[ɔʏ]	[ə]
[ʔ]	ア	イ	ウ	エ	オ	(イ)	(エ)	アイ	アオ	オイ	エ
[k]ク	カ	キ	ク	ケ	コ	(キ)	(ケ)	カイ	カオ	コイ	ケ
[g]グ*	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	(ギ)	(ゲ)	ガイ	ガオ	ゴイ	ゲ
[ŋ]ング	ンガ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ンゲ
[s]ス	サ	スイ	ス	セ	ソ	(スイ)	—	—	—	ソイ	セ
[ʃ]㋷	㋷ヤ	シ	㋷ユ	㋷エ	㋷ヨ	(シ)	(シエ)	㋷ヤイ	㋷ヤオ	㋷ヨイ	㋷エ
[z]ズ*	ザ	ズイ	ズ	ゼ	ゾ	(ズイ)	(ゼ)	ザイ	ザオ	ゾイ	ゼ
[t]ト	タ	テイ	トウ	テ	ト	(テイ)	(テ)	タイ	タオ	トイ	テ
[tʃ]㋦	㋦ヤ	—	—	㋦エ	—	—	—	—	—	—	㋦エ
[ts]ッ	ッア	ッイ	ツ	ッエ	ッオ	(ッイ)	(ッエ)	ッアイ	ッアオ	ッオイ	ッエ
[d]ド*	ダ	デイ	ドウ	デ	ド	(デイ)	(デ)	ダイ	ダオ	ドイ	デ
[n]ン	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	(ニ)	(ネ)	ナイ	ナオ	ノイ	ネ
[h]	ハ	ひ	ふ	へ	ホ	(ひ)	(へ)	ハイ	ハオ	ホイ	—
[ç]ヒ	ヒヤ	ヒ	—	ヒエ	ヒヨ	—	—	—	—	—	ヒエ
[f]フ	ファ	フイ	フ	フエ	フオ	(フイ)	(フエ)	ファイ	ファオ	フオイ	フエ
[v]ヴ*	ヴア	ヴイ	ヴウ	ヴエ	ヴオ	(ヴイ)	(ヴエ)	ヴアイ	—	—	ヴエ
[b]ブ*	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	(ビ)	(ベ)	バイ	バオ	ボイ	ベ
[p]プ	パ	ピ	プ	ペ	ポ	(ピ)	(ペ)	パイ	パオ	—	ペ
[m]ム	マ	ミ	ム	メ	モ	(ミ)	(メ)	マイ	マオ	モイ	メ
[j]イ	ヤ	イイ	ユ	イエ	ヨ	(イイ)	(イエ)	—	ヤオ	—	イエ
[l]ル	ラ	リ	ル	レ	ロ	(リ)	(レ)	ライ	ラオ	ロイ	レ
[r]る	ら	り	る	れ	ろ	(り)	(れ)	らイ	らオ	ろイ	れ
[pf]プフ	プフア	プフイ	プフウ	プフエ	プフオ	(プフイ)	(プフエ)	プフアイ	プフアオ	プフオイ	プフエ
[-x]	—は	—	—ふ	—	—ほ	—	—	—	—ほ	—	へ

- * 語末・音節末には用いられない。
- 長母音は長音記号「ー」で示す。長音の変母音では「ー」もカッコ内に入れる。
- ガ，ゲ，ゲ はガ行鼻音を表わす。
- (　)，○は円唇音を表わす。
- ーは該当音がないか，又は普通には用いられない音の組み合せを示す。
- ◡は密接な関係にあるものを示す。
- ひらがなを利用した部分は，浮き立たせるために，ゴシック活字を用いた。

5.

最初に挙げた「法経科大学生のドイツ語入門（法学篇）」（三修社）の発音説明の部（13—22頁）に出ている単語を材料にしてカナ音声字母を試みてみたい。国際音声字母と併記するのが本来であろうが，与えられた紙数をすでに超過しているので，原語とカナを列挙する。

ja,	wen,	Indiz,	Not,	gut,	Irrtum,	Pakt,
ヤー	ヴエーン	インデイーツ	ノート	グート	イるトウーム	パクト
best,	Herz,	Text	Volk,	Unfall;	Wille	
ベスト	へるツ	テクスト	フオルク	ウンフアル	ヴイレ	
Regel,	haben;	bekommen,	Gedanke;	Vater,	Mutter,	
れーゲル	ハーベン	ベコメン	ゲダンケ	フアータ	ムッタ	
wer;	Paar,	Idee,	Boot;	Wahl,	Ehe,	ihn,
ヴエーア	パーる	イデー	ボート	ヴアール	エーエ	イーン
Lohn,	Ruhm;	Umlaut;	Väter,	wählen,	Männer;	
ローン	るーム	ウムラオト	フエータ	ヴエーレン	メンナ	
mögen,	Höhe,	können,	müde,	führen,	Mütter;	
(メー)ゲン	(へー)エ	(ケ)ンネン	(ミー)デ	(フイー)れン	(ミッ)タ	
eins,	Mai	Meyer,	Bayern;	Zeuge,	Räuber;	
アインス	マイ	マイヤ	バイエるン	ッオイゲ	ロイバ	
Frieden;	Raub,	Land	Tag,	du	raubst,	Landtag,
フりデーン	らオプ	ラント	ターク	ドウー	らオプスト	ラントターク
Sonntag,	Sitte,	Fluß,	Flüsse,	Fuß,	Füße,	er
ゾンターク	ズイッテ	フルス	(フリ)ッセ	フース	(フイー)セ	エア
weiß,	wissen;	ach,	hoch,	Buch,	auch,	ich,
ヴアイス	ヴイッセン	アッは	ホーほ	ブーふ	アオほ	イッヒ
Recht,	China,	Töchter,	Tochter,	Kirche;	zwanzig,	
れヒト	ヒーナ	(テッ)ヒタ	トッほタ	キるヒエ	ッヴアンツイッヒ	
gleichberechtigt;	sechs,	des Buchs;	Pflicht,			
グライヒ・べれヒテイヒト	ゼックス	デス ブーふス	プフリヒト			
empfehlen;	Qualität,	Quantität;	Verwaltung,			
エンプフエーレン	クヴアリテート	クヴアンテイテート	フエアヴアルトウング			

Zwang, Mangel, Junge; Mensch, schön; Sprache
ツヴアングゲ マンゲル ユンゲ メンゼン (シエー)ン ゼプらーヘ

Staat, Sprachstunde; deutsch; Zweck; Stadt,
ゼタート ゼプらーはゼトウンデ ドイチ ツヴエック ゼタット

Grundgesetz, nachts, abends; Typus, Zivilrecht,
グるント・ゲゼッツ ナはッ アーベンツ (テイー)プス ツイヴイールれヒト

Philosophie, Theorie, Rhythmus, Charakter,
フイロゾフイー テオりー (り)トムス カらクタ

Initiative, partiell, Nation, Familie,
イニツイアテイーヴエ パるツイエル ナツイオーン フアミーリエ

Aktie.
アクツイエ

参 考 文 献

von Essen, Otto: Allgemeine und angewandte Phonetik Akademie-Verlag Berlin 1966[4]

服部 四郎: 音声学 岩波全書 Nr. 131 1958[9].
音韻論と正書法 研究社 1951[1].
言語学の方法 岩波書店 1960[1].

Martens, Carl u. Peter: Phonetik der dt. Sprache praktische Aussprachelehre Max Hueber Verlag München 1961[1].

内藤 好文: ドイツ語音声学序説 大学書林 1958[1].

塩谷 饒: ドイツ語発音の研究 三修社 1959[1].

楳垣 実: 日本外来語の研究 研究社 1963[1].

矢崎源九郎: 日本の外来語 岩波新書 1966[4].

国語学会編: 国語学辞典 東京堂 1966. 訂正14版

続日本文法講座 2. 表記篇 明治書院 1958[1].

拙稿: Über die Aussprache des Deutschen bei Japanern 慶応義塾大学 法学部「法学研究」別冊,「教養論叢」第17号 1966.